

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	久納 源太
論文題目	Divisions and Orders in Contemporary Jakarta: An Empirical Study on the Spread of Residential Street Barrier (現代ジャカルタにおける分断と秩序 —路地バリアの普及に関する実証的研究—)		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士論文は、世界有数のメガシティ、インドネシアの首都ジャカルタで一般的な路地バリアの普及を総合的に分析することを目的としている。路地バリアとは、地域コミュニティが住宅地の道路に設置・管理する門や障害物である。本博士論文は、ジャカルタにおける路地バリアの空間的広がりを実証的に分析し、その設置を正当化する言説を分析することで、街路単位で分割された居住空間の集合体としてジャカルタを描いた博士論文である。</p> <p>章構成は以下の通りである。第1章は先行研究を踏まえて本博士論文が取り組むテーマを明らかにしている。ジャカルタを含め、大都市圏では郊外化や社会経済的格差の拡大に伴いゲーティッド・コミュニティ (以下、GC) と呼ばれる高所得者の排他的な居住空間が広がり、都市空間の分断をもたらしているという議論が多い。本博士論文は、そうした議論とは異なり、ジャカルタの路地バリアを網羅的に把握することで、実は路地バリアが階層横断的に普及していることを実証し、さらに、路地バリアを普及させてきた言説の歴史的変遷を分析することを目的とした。</p> <p>第2章では、OpenStreetMapのタグ・データの目視による検証と現地調査で入手したデータを用いて、路地バリア普及の社会空間的パターンをジャカルタ首都特別州全域で分析した。その結果、デザインや密度などで地域差があるものの、路地バリアはジャカルタ全域に広がっていることがわかった。特に、ジャカルタの北西部と北東部を中心とした住宅地と商業地が混住する密集地域では、ゲート化されたカンポン (高密度居住地) にも、富裕・中間層のGCにも路地バリアが目立ち、それが路地バリアの階層横断的な拡散に寄与していることを示した。</p> <p>第3章では、2010年代のMusrenbangと呼ばれる参加型予算案作成システムに提出された提案書の解析により、路地バリアの設置要望は犯罪防止や交通事故防止といった日常的な安全確保のためであることを明らかにした。第4章は、路地バリアが広域に普及している背景として、住宅道路の管理権限が曖昧であり続けるなかで、日常的な安全確保には路地バリアが有効であるという価値観が半世紀に渡って共有され続けていることを指摘した。そして、2020年代初頭のコロナ感染症拡大期にもコミュニティを守る手段として路地バリアが活性化したことを示した。</p> <p>第5章では、新聞の読者欄、裁判記録や条例、行政の対応などに基づいて、路地バリア</p>			

ア批判言説、自治体の路地バリア撤去政策を分析した。2000年代に入ると、路地バリアの拡散が交通の便を妨げ公共の利益に反するという路地バリア批判言説が見られ始め、そうした言説を背景とした撤去政策が始まった。しかし、路地バリア設置支持言説が支配的であり、撤去されたのは、高所得者向けGCの路地バリアの一部に過ぎず、カンポンの路地バリアは批判の対象にさえなっていないことを明らかにした。

第6章では、これまでの章をまとめる形で、分断都市としてのジャカルタの実像を再考した。現代のジャカルタの特徴は、高所得者向けGCとそれ以外という形で空間的分断が起きているのではなく、所得階層の異なる居住空間のいたるところに設置されている路地バリアにより、ミクロな分断が進んでいることである。言説としても政策としても、日常的な安全確保の重要性を強調するかたちで、そうしたミクロな居住環境の分断を正当化していることがわかった。さらに、こうした現代のジャカルタで路地バリアが一般化した過程から、民主化・分権化のなかでコミュニティを重視する社会政治的志向が意図せぬ形で都市全体の公共圏の喪失をもたらしていることを論じた。最後の第7章では、本博士論文が路地バリアの情報収集に用いた独自の方法論に触れて本博士論文を終えている。

(論文審査の結果の要旨)

本博士論文が優れているのは次の4点である。まず何よりも、既存研究が見過ごしてきた路地バリアに着目した点である。路地バリアは、インドネシアのジャカルタ首都圏では非常に一般的である。しかし、大半の先行研究は高所得者層のゲーティッド・コミュニティにしか関心を払っていなかった。そうした先行研究を批判的に捉え、路地バリアがあらゆる所得階層の居住区に広がっていることを指摘した。極めて重要な現象でありながら、既存研究が看過してきたことに着目したことは評価できる。加えて、第2番目に、ジャカルタ各地に見られる路地バリアについて、いくつかの事例を分析するだけでなく、ジャカルタ首都特別州という行政単位全体を分析対象として、OpenStreetMapのタグ・データの目視と現地調査を通じて、実証的に全域的広がりを明らかにしたことである。ジャカルタは1000万人以上の人口を抱える世界有数のメガシティである。そうした都市において、路地バリアという街路単位で設けられる建造物の全体的広がりを分析することは容易ではない。フィールドワーク重視の既存の地域研究的手法に、情報学的手法を極めて積極的に取り込むことで、ジャカルタ全域の特徴の把握に成功した。これは、方法論としても新たな地域研究の可能性を提示するものであり、非常に高く評価できる。

3番目に、こうした網羅的データに基づいて、ジャカルタ全域における路地バリアの空間分布のばらつきを分析したことである。路地バリアがジャカルタ各地にあることはわかっているが、地域ごとの密度の違い、監視カメラや警備員の詰め所などの他のセキュリティ装置との組み合わせの特徴などについては、これまで誰も関心をいだいてこなかった。本博士論文では、こうした路地バリアの空間分布のばらつきを分析することで、例えば、所得階層の異なる居住区が隣接している地域ほど路地バリアが多いことを実証するなど、ジャカルタ内の地域別特徴を明らかにすることに成功した。

4番目に評価できるのは、路地バリアの空間的ばらつきを説明する上で、ジャカルタという都市の発展段階の分析を盛り込むことで、ジャカルタという都市の史的ダイナミズムを路地バリアから描き出すことに成功している点である。本博士論文は、情報学的な分析を踏まえて路地バリアの広範な展開を実証的に示すにとどまらず、こうした広範な展開を可能にした言説を歴史的に分析している。空間情報学的な分析では、空間情報の変化を示すだけにとどまることもあるのに対して、本博士論文では、こうした変化を可能にした文脈を様々なデータ（新聞の読者欄、裁判記録、条例、住民組織長らへのインタビュー）を用いて明らかにしている点は高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年9月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認められた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。